

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 21 日現在

機関番号：34305

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2015

課題番号：26870715

研究課題名(和文)大正期における九谷焼の研究

研究課題名(英文)Research on Kutani Ware in the Taisho Era

研究代表者

前崎 信也(MAEZAKI, SHINYA)

京都女子大学・家政学部・准教授

研究者番号：20569826

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は研究代表者が京都府宇治市の朝日焼窯元で発見した、松林靄之助『石川県陶業地方見学記』(1918)に記録された大正期の石川県の陶磁器業に関する調査研究を目的としている。本研究では同書に記録されている石川県内の陶磁器業者の現状把握のため全5回の現地調査を行った。上記の結果を元に研究を進め、最終年度末までに、10件の研究発表、5件の研究論文、2件の図書の出版を行うことができた。更に「近代陶磁器資料データベース」上で、同書の全頁の画像データを公開した。研究成果については今後も継続的に発信していく予定である。以上の研究成果により、大正期における九谷焼の実態の一部を明らかにすることができた。

研究成果の概要(英文)：This research focuses on the study of Kutani ware (porcelain ware with overglaze poly-chrome decorations produced in Ishikawa Prefecture) produced during Taisho era. The main material for the research is "Ishikawa-ken togyo chiho kengakuki" (record on the ceramic industry of Ishikawa Prefecture), written by Matsubayashi Tsurunosuke in 1918. The book was discovered in a few years ago in the collection of Asahi Ware kiln in Uji, Kyoto. The principal researcher made five research visits to Ishikawa in order to survey current situation of ceramic manufacturers, which recorded in the book. As a result of this research, 10 academic presentations were given and 5 journal articles and 2 books were published. In addition, all the images and text data of the book have been uploaded and publicized at Modern Japanese Ceramics Image Database. This project will continue, but has already shed light on Kutani ware production of the Taisho era.

研究分野：工芸文化史、文化情報学、東洋陶磁研究

キーワード：九谷焼 データベース 旅行記 近代陶芸史 京焼 大正期

1. 研究開始当初の背景

明治・大正期の日本の陶磁器業に関する研究は、全国各地の産地が急速に進む産業の西洋化にいかに対応し、万国博覧会等を通じて海外進出に成功したかに注目が集まってきた。地域の地場産業振興を主たる目的とし、過去に海外で活躍した郷土の偉人が発掘され、地域の資料館・博物館で発信される。こうして全国の産地で同じようなストーリーが生産され続けてきたといえる。他方、同時代に各地域がどのような関係性を築き、業界全体の中でどのような役割を果たしていたかについては、一部の例外を除きほとんど語られることはなかった。そこで、本研究では、日本を代表する陶磁器産地としての九谷焼の動向について研究し、近代日本陶磁器業の発展に果たした九谷焼の役割の一端を明らかにすることを目的とする。

2. 研究の目的

九谷焼は17世紀から磁器の生産を開始し、現代に至るまで数多くの窯が優品を製作、日本陶磁史に名を遺してきた。しかし、17世紀の古九谷様式の産地をめぐる、いわゆる古九谷論争が繰り返されてくる中で、特に明治・大正期の九谷焼に対する研究は疎かになってきたと言わざるをえない。その結果、近代の九谷焼に関しては未だ謎が多く、時代の古い江戸期の生産体制の方がはるかに詳細に明らかであるという逆転現象が起きている。本研究では近年京都で発見された大正7年(1918)の九谷焼の調査報告書、『石川縣陶業地方見学記』(以下、見学記)の内容を元に、近代日本の美術陶芸を牽引した産地のひとつである九谷焼について研究する。

3. 研究の方法

(1) 研究資料のデジタル化と画像データベースによる公開

本研究が注目する『見学記』は、京都府宇治市で今も茶陶を制作する朝日焼の十二世松林昇斎(1865~1932)の次男である松林靄之助(1894~1932)によって著された。松林は濱田庄司(1894~1978)や河井寛次郎(1890~1966)に師事し、卒業後の1922年(大正11)から約2年半の欧州留学中に英国人陶芸家バーナード・リーチ(1887~1979)と出会い、リーチが長年利用した日本式登り窯を建造したことで知られる。『見学記』は、その松林が渡欧前の1918年(大正7)11月、京都市立陶磁器試験場附属伝習所在籍時に調査し著したものである。貴重資料の一般公開を果たすため、デジタル化を行う。それを画像データベース上で公開することにより、研究の効率化にもつながる。

(2) 大正期における九谷焼に関する資料調査・聞き取り調査

石川県内の九谷焼に関する学校・工場・窯元への聞き取り調査。調査先：金沢市：石川県立工業高等学校(旧 石川県立工業学校)、白山市：株式会社 NIKKO(旧 日本硬質陶器会社)、加賀市：矢口永壽氏、須田菁華氏、嶋田寿楽氏(旧 大蔵分家工場)、青泉窯(旧 北出工場)、五代中村秋塘氏、中村元風氏(中村秋塘家分家)、小松市：八弘窯 木田弘之氏(旧 木田工場)、宮本直樹氏(旧 宮本工場)、谷口製土所。

上記の聞き取り調査先での近代資料の現存状況の確認。九谷焼関連施設での調査。石川県九谷焼美術館、加賀市美術館、能美市九谷焼資料館、小松市立博物館、石川県立図書館等。

4. 研究成果

(1) データベースによる資料の公開。

研究代表者は2014年からインターネット上で「近現代陶磁器資料データベース」を管理・運営している。これは、近代における日本陶磁器関連の資料に関する総合画像データベースである。2015年度にはシステムを再構築し、より検索しやすくセキュリティの高いデータベースを実現し公開した。



近現代陶磁器データベース詳細画面

(2) 九谷焼の窯元・資料調査

研究の方法で提示した石川県内の九谷焼窯元・関連施設への聞き取り調査はほぼすべて終わることができた。それにより、大正期の九谷焼に関連する現存資料が極めて少ないことが明らかとなり、『見学記』の資料的価値を再認識するに至った。

石川県九谷焼美術館、加賀市美術館、能美市九谷焼資料館、小松市立博物館の九谷焼関連資料調査を行った。特に九谷焼美術館と小松市立博物館では、最近寄贈された九谷焼窯元旧蔵の図案帖の存在を確認した。

石川県立図書館では『北國新聞』中の九谷焼関連記事の収集を行った。更に、近代の九谷焼関連の資料収集(書籍・絵葉書・古写真)を行った。

本研究では、海外コレクション所蔵の九谷焼調査も行った。その結果、イギリスのデイヴィッド・ハイアット・キングコレクション所蔵の九谷焼を調査。スコットランドにも数百点を有する九谷焼個人コレクションを発見することができた。



キングコレクション所蔵の九谷焼花瓶

(3) 近代における九谷焼と京焼の関係

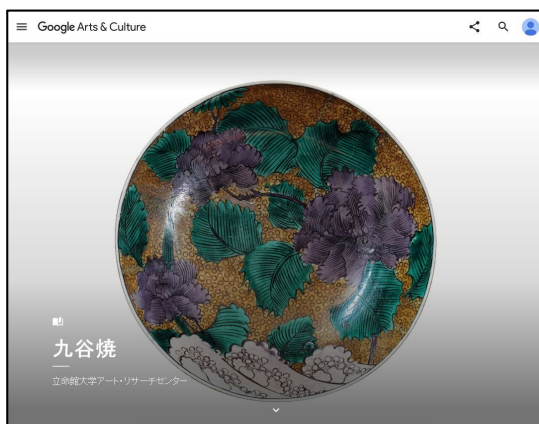
特に青泉窯(旧 北出工場)については全3回の訪問、調査を行った。北出窯は「色絵磁器」で第1回の重要無形文化財保持者に認定された富本憲吉(1886-1963)が色絵の技術を学んだことで知られている。同地では、現存する九谷焼及び富本憲吉関連資料の調査を行い、貴重なものに関してはデジタル化を行った。本研究は当初、大正期における九谷焼のみを研究対象にしていたが、研究を進める中で九谷焼と京焼の密接な関係が見えてきたため、近代の京焼研究にも発展をみせた。

本研究の成果として、図書を3件出版することができた(1件は2016年度内に出版予定)。いずれも、近代における九谷焼と京焼の関係について触れており、前崎信也編『大正時代の工芸教育 京都市立陶磁器試験場の記録』及び、森野彰人・前崎信也編『富本憲

吉著『我が陶器造り』の出版においては、本研究の調査結果が多く反映されている。

(4) 九谷焼の世界発信

2015年は九谷焼開窯360年という節目の年であるため、全国各地で九谷焼関連の催事が企画された。本研究は当初、このタイミングに合わせて『見学記』の出版を目指していたが、残念ながら実現することはできなかった。他方、研究代表者は Google Cultural Institute 内に「Made in Japan:日本の匠」という世界に向けた日本工芸品を紹介するテーマサイトを構築した。そこに、本研究で構築した人的ネットワークを生かして、九谷焼を紹介するテーマサイトを構築した。本サイトは2016年1月に公開された。



Google Cultural Institute「Made in Japan:日本の匠」九谷焼テーマサイト トップページ

(5) 研究成果の発信

本研究の成果については、以下の雑誌論文・研究発表・図書等で行ってきた。しかし、2年間という研究期間では調査等が研究の中心となってきたため、成果の発信はまだ道半ばという状況である。そのため、2016年度以降も継続して学会発表や論文等で成果発信を続ける。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

Shinya Maezaki, "The Kyoto City Ceramic Research Center (1896-1920) and Ceramic Art Education during the Taisho Era", *Ceramics, Art, and Cultural Production in Modern Japan*, 2016, 査読有, 採録決定済, 頁数未定 全11頁

前崎信也「文献紹介 朝日焼所蔵 松林鶴之助『石川県陶業地方見学記』1919年」『生活造形』61号、2015、54-59

前崎信也「美術展覧会という外交—1935年にロンドン王立美術院で開催された大

中国美術展と日本」鹿島美術財団編『鹿島美術研究：年報第 32 号別冊』32 号、2015、415-425、査読有

徳永留美、出口肇、岡崎友紀、前崎信也、篠田博之「白磁の照明光色の違いによる色知覚と印象評価」日本色彩学会誌 SUPPLEMENT(2015)日本色彩学会第 46 回全国大会[米沢]15 発表論文集、2015、39-5、122-123、査読有

Shinya Maezaki, Naturalism in Meiji-period Ceramics: Basin with a Crab by Miyagawa Kozan I (1842-1916), *Andon*, vol.99, 2015, 33-41, 査読有

前崎信也「五条坂に残る粟田口の登り窯—安田家と京都陶磁器合資会社」京都市編『元藤平陶芸登り窯の歴史的価値等調査研究』2015、17-28

〔学会発表〕(計 10 件)

前崎信也「大正期における九谷焼と中村秋塘」(招待講演) 2016 年 10 月(日程調整中) 会場：石川県九谷焼美術館

前崎信也「帝室技芸員としての三代清風與平」国際近代陶磁研究会 2016 年度総会シンポジウム(招待講演) 2016 年 6 月 19 日、会場：瀬戸市民文化センター

Shinya Maezaki, “Japanese Export Porcelain for the Chinese and Korean Market in the Meiji period”, International Symposium: Histories of Japanese Art and Their Global Contexts; New Directions (招待講演・国際学会), 11 October 2015, Heidelberg University

徳永留美、出口肇、岡崎友紀、前崎信也、篠田博之「白磁の照明光色の違いによる色知覚と印象評価」日本色彩学会代 46 回全国大会[米沢]15、2015 年 9 月 26 日、会場：山形大学米沢キャンパス

前崎信也「世界と工芸と日本—工芸が伝統文化になる時—」日本工芸会近畿支部研究会(招待講演)2015 年 7 月 3 日、会場：ハートピア京都

前崎信也「素材が失われる時、工芸はどこに行くのか」藝術学関連学会連合第 10 回公開シンポジウム、2015 年 6 月 13 日、会場：京都国立近代美術館講堂

前崎信也「五条坂に残る登り窯の今—産業廃棄物と文化遺産のはざま—」国際シンポジウム・シリーズ「つたえる力 3」京都の石と土—伝統工芸を支える資源—、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「京都における工芸文化の総合的研究」、2015 年 3 月 8 日、会場：キャンパスプラザ京都

Shinya Maezaki, “Tradition in Motion: Creating “Jakuchu” with Bamboo and

Lacquer”, 意匠学会大会、2014 年 7 月 27 日、会場：お茶の水女子大学

前崎信也「美術展覧会という外交—1935 年にロンドン王立芸術院で開催された大中国美術展と日本—」民族芸術学会例会、2014 年 6 月 28 日、会場：兵庫県立美術館

Shinya Maezaki, “On the Role of the Kyoto City Ceramic Research Center (1896-1920) in Education for Taisho Era Ceramic Art”, International Workshop: Ceramics, Art, and Cultural Production in Modern Japan, 23 May 2014, Sainsbury Institute for Japanese Arts and Cultures, Norwich, UK

〔図書〕(計 3 件)

森野彰人・前崎信也編『富本憲吉著 我が陶器造り』李文出版、2016 年出版決定、入稿済

前崎信也『大塩が生んだ京焼の名工 三代清風与平』キャッチボール、2014、全 52 頁

前崎信也編著『大正時代の工芸教育—京都市立陶磁器試験場附属伝習所の記録』宮帯出版社、2014、全 564 頁

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0 件)

○取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等(計 2 件)

近現代陶磁器資料データベース

<http://www.dh-jac.net/db1/mjci/index.php>

Google Cultural Institute「Made in Japan: 日本の匠」

<https://www.google.com/culturalinstitute/beta/project/made-in-japan>

宮永東山窯陶磁器データベース

<http://miyanagatozan.com/contact>

6. 研究組織

研究代表者

前崎信也 (Maezaki, Shinya)

京都女子大学・家政学部生活造形学科・准教授

研究者番号：20569826

研究分担者

連携研究者